NIE実践報告

1．タイトル：☆命を大切にする心をはぐくむ道徳の実践~新聞を活用した授業を通して~

2．学校名

鹿児島県薩摩川内市立海陽中学校

3．実践者名（代表者名）

福丸　恭伸

4．学年

第1学年

5．教科・領域名および受講児童・生徒数

道徳　6人

6．単元（本時の学習課題）名

生命の尊重（3-　2）生命の尊重、資料名「おぼれかけた兄妹」（有島武郎著）

7．目標(狙い)

一人ひとりの生命がかけがえのないものであることを深く自覚し、自他の生命を大切にしようとする心情を養う。

8．評価の視点

新聞等の資料を活用して、生命のかけがえのなさを実感し、自他の生命を尊重し合っていこうとする心情が深まったか。

9．年間指導計画における本単元の位置づけと時数

（または、単元展開および時数と本時の位置づけ）

「おぼれかけた兄妹」（道徳副読本教材：学習研究社）1時間

10．単元（本時）の学習展開（含む時数）と留意点

①「心のノート」p76を読み、生命の有限性を考える。(6分)
②「おぼれかけた兄妹」の朗読文をテープで聞く。（8分）
③おばあ様が止めるのも聞かず引きの強い海に入って行った「わたし」の気持ちを考える。（8分）
④もし自分の妹がおぼれていたら「助ける」か「助けない」か討論する。（10分）
⑤おばあ様の胸で泣きじゃくる妹を見つめる時の「わたし」の気持ちを考える。（8分）
⑥南日本新聞（1998.H10.7.30）の実際に起こった水難事故（担任した生徒の妹溺死、助けに行った父親も溺死）の記事を紹介し，一人のもつ生命の尊さを考える。（10分）

（留意点）

・鹿児島新報（1998.H10.7.30）の滝壺における水難事故の記事から日常生活に潜む危険の存在に気づかせる。
・朝日新聞（1999.H11.8.14~　16夕刊）の神奈川県玄倉川災害の記事から、再三の勧告・警告が生かされなかった事例を示し、おばあ様の忠告のもつ重さを考えさせる。

11．児童・生徒の反応、感想・意見

自分の妹がおぼれていたら、助けるか？助けないか？という発問に対し、当初は「状況による」と考えていた生徒も討論後、全員が「助ける」という意見に変わった。授業後、「自分なら危なくても助けたいが、新聞記事や先生の話を聞き、考えさせられた」と感想を述べていた。

12．成果と課題

教科指導に偏りがちなNIEであったが、道徳でも新聞を効果的に活用することができることが分かった。新聞そのものが命を大切にする心をはぐくむ教材となった。ただ、実際の水難事故の新聞記事をとりあげることが、ご遺族の気持ちを傷つけないかという不安が残った。そのため、水難事故を遭難者の不注意とするのではなく、「自分だったら」と、遭難者の心情に立って深く考えることが必要であり、そのことがご遺族に対する最大の配慮となるのではないかと考えた。